

## 第七講 歴史主義全盛期の他の歴史分野

### レポート講評

課題：近代とは何か

講評：近代のキーワードとして「産業革命」を挙げるレポートが多かった。機械化、大量生産、交通機関の高速化と大量輸送、都市の発達、さらには生活の便利性の向上など、高校の世界史に記述されている内容が反復されていた。そのような産業革命の肯定的側面を強調するだけでなく負の側面、即ち劣悪な都市の生活環境に目を向ける必要があるし、労働者階級の創出とそれに伴う労働環境にも言及する必要もあっただろう。

この産業革命と関係するのだが、「帝国」の形成に言及しているレポートもあった。イギリスなど先進工業諸国での大量生産を支えるためにアジア・アフリカの植民地化・保護国化が進展していったことを指摘するレポートがあった。先進工業国に原材料を安定的に供給するために資本や技術が投下され、農場や鉱山、鉄道、学校、行政組織などがこれらの地に建設されていくが、それが植民地の本国への従属化を強固なものとしていったこと、伝統的な産業構造を破壊し効率的なモノカルチャー化をもたらしたこと、そして植民地支配の成果が今日に至るこれらの地域の経済的脆弱性、貧困の再生産、旧本国への文化的従属の原因でもあったことへの言及も必要であろう。さらに言えば伝統的産業基盤を破壊すると同時に伝統的支配層と連携することでこれらの支配者層は温存されてしまったことも重要だろうと思われる。

この近代を歴史のスケールの中でどの様に位置づけるのかについて苦心しているレポートもあった。というのは西洋では古代 (Ancient)・中世 (Medieval)・近代 (Modern) と三時代に区分するのが普通で、日本で言う現代に相当する言葉がないからである。勿論、現在 (Contemporary) という言葉はあるが現在と現代は重なる部分もあるが重ならない部分もあるからである。レポートでは 17/18 世紀から第一次世界大戦までを近代と位置付けているケースが多かった。ひょっとすると 20 世紀の終わりまで近代なのかも、ということを考えても良さそうだ。逆にルネサンスは近代に入るのか、それとも中世に属するのかについて議論をしてみよう。ブルクハルトとホイジンハという歴史家が浮かんでくる。強烈な個人主義 (チェーザレ・ボルジアのような) や合理主義 (複式簿記など) が一方にあり、他方にブルゴーニュ公国に花開いたフィリップ善良公の宮廷文化をどのように評価されるのか。

さて、その上でこの近代が現在の中にどのように位置づけられるのかを考察しなくてはならない。宗教からの解放や中世的な道德倫理からの脱却を指摘するレポートは色々

とあった。近代が生み出した合理主義、科学主義、個人主義、民主主義。これらの理念や制度は現在においてもその根底に横たわっている。しかし現在はその合理主義、科学主義、個人主義、民主主義の負の側面も体験してきているし批判的でもある。近代が生み出した様々な新兵器が従来のプロの兵士たちだけの戦争を国民全体を巻き込む戦争へと姿を変え、非戦闘員である一般市民も殺戮の対象へと姿を変えさせていったのである。その延長線上に今日の「核の恐怖の均衡」がある。核保有国のミサイルは軍事基地ではなく人々が多く住む大都市を標的としているのである。このように近代が新兵器を生み出し、新兵器が新しい戦争を生み出していったことを指摘するレポートも散見された。

この授業には西洋史だけでなく日本史の学生も受講しており、日本の歴史における近代を考えるレポートもあった。基本的には明治以降を論じており、封建的な諸関係や諸観念が西洋的なそれに置き換えられていくプロセスとして捉えられていた。確かに廃藩置県による行政の近代化、殖産興業による産業の近代化、学制や教育令による教育の近代化、陸海軍による軍事の近代化、鉄道の開設による交通の近代化などによって日本は急速に西洋諸国をキャッチアップしていく。しかしその原資は農民の負担によって賄われていたこと、旧制高校や陸軍幼年学校・海軍兵学校などを通してエリート支配の社会が構築されたこと、民主主義も育って来ていたが同時に天皇制に基づく権威主義も国民の間に浸透し強固な影響力を及ぼしていたこと、産業至上主義が様々な公害を引き起こしたこと、国民意識の育成と市民意識の醸成との間に深刻なギャップを生じたこと等、戦後日本がその出発に当たって直面しなければならなかった諸問題を近代が生み出したことに目を向ける必要がある。その上で皆さんは「戦後 70 年」を近代と見るのか、それとも近代を超克した反近代の現代と見るのかどちらだと思いますか。

## 経済史の系譜

### 国民学派（歴史学派）経済学

#### F. リスト

ロッシャー、クニース（旧学派）

シュモラー、ブレンターノ、ビュヒャー（新学派）

ゾンバルト、ヴェーバー（最新学派）

保護関税政策

所得の再分配・社会政策→社会主義に対抗

経済の歴史的発展段階

文献・統計資料による実証的研究

理念系の構築

社会経済史

文化史論争（ランプレヒト：他者の排除）

**K. ランプレヒト（1856 - 1915）**

マールブルク大学教授

ライプチヒ大学教授（1891年～）

『中世ドイツの経済生活』4巻(1886)

『ドイツ史』12巻(1891 - 1909)

1909年「文化史・普遍史研究所」設立,

法則的・段階的文化発展論

諸民族の文化を比較

普遍史を追及

ランケ流政治史を非科学的と批判

文化史論争